

戦争の罪責はもともと
平和の罪責である

戦争の勃発と同時に
生起したのではない

市川白弦
元臨濟宗妙心寺派僧侶

戦争の罪責はもともと平和の罪責である。戦争の罪責戦争の勃発と同時に生じたのではない。それは平和のなかでの平和に対する罪責である。われわれの戦争責任は、平和の時代における平和と自由にたいする罪責の平生業成のつみかさねであり爆発である。われわれは個人としてまた共同体として、平和のなかで平和と自由への罪責をつみかさねてきたのである。そして現在もなおつみかさねつつある。

(市川白弦／元臨済宗妙心寺派僧侶・花園大学教授『仏教者の戦争責任』春秋社 一九七〇年より)



■岐阜県加茂郡の貧しい禅宗寺院に生まれた市川白弦師（1902～1986年）は、教鞭をとりながら京都へ平連など社会運動にも参加し、教団の戦争責任や宗教と国家の関係について追求した。退職後に還俗。

戦前～戦後における行動や思想についてまず本人自身が反省に立ち、さらに大乘仏教の論理そのものが、日本人の内なる天皇制的エートスと結びつきつつ体制を擁護し、結果的に戦争を是認していたと批判する。

仏教における平和はまず「安心立命」という究極的な平安として追求されるが、白弦はこの安心の道が、現実と和解する受動的な生活態度に結びつき、やがて和戦一如にまで繋がってゆく可能性を危惧する。

心の平和は、国家の戦争行為に対する市民的不服従の足場にはならないと結論する彼は、禅や華嚴哲学をもとに、マルキシズムやアナーキズムの影響を受けつつ、仏教者の社会実践のあるべき内容として「空—無政府—共同体論」（一種の無政府共産主義）を提示した。

仏教が生み出す社会倫理は、むしろ社会正義の実践についての己れの無力さを自覚せよという要求だったり、「是非を言わぬ」（鈴木大拙）という態度だったりするが、災害や紛争、福祉的場面において仏教者はどう社会に関わるのかは、現代的課題のひとつだ。

覚者であっても、不条理な暴力にさらされるという歴史的現実を生きてきた。戦争責任の問いは、自己を問うという仏教の基本的姿勢の中に置かれて、いよいよ仏教者を動かす。「衆生を救う道をほかにして、真に自己を救う道はない」（『禅の基本的性格』1942）と記されるように、大乘思想の自他無分別への開かれ方が問われるのだろう。（引用：日本仏教者の平和思想／京都大学大学院文学研究科教授・氣多雅子、ほか）

■同じ岐阜県垂井町には、市川師の親の世代である真宗大谷派明泉寺住職・竹中彰元師（1867～1945年）が反戦僧侶として知られる。宗門人・布教使として着実に高位の実績を得たが、国策追従のために教団が浄土



真宗の教義を捻じ曲げようとしたことから、1937年盧溝橋事件勃発後に「戦争は最大な罪悪である」と地元で述べて逮捕され、本山から重い処罰を受けた。敗戦直後に死去して70年後に名誉回復を果たし、映画「明日へ～戦争は罪悪である」（2017年）のモデルにもなった。

■さて表題の言葉は、世界で40ヶ所以上の紛争の仲裁に関わり、平和学の父と呼ばれるノルウェーの社会学者、ヨハン・ガルトゥング氏（1930年～）が提唱する「積極的平和（主義）」を想起させる。



それは、単に（直接的暴力や）戦争のない状態を平和と考える「消極的平和」に対して、貧困・抑圧・差別などの構造的暴力がない状態を「積極的平和」と定義される（2015年当時安倍総理は誤解釈と批判）。

例えば、30年近くアフガニスタンで灌漑事業を行い、教会や学校を建て、農民たちの健康と生活基盤を回復させてきた医師の中村哲氏（1947～2019年）は「彼らの唯一にして最大の望みは、故郷で家族と毎日3度のメシを食べること。農業が復活すれば外国軍や武装勢力に兵士として雇われる必要もなく、平和が戻る」と説く。



■釈尊は「すべての者は暴力におびえる。すべての生きものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」（法句経 130偈）と言い残した。いじめ・差別・分断・暴力がもたらされる因縁を考える時、傍観・無関心という態度もそれに加担しており、また他者を（直接間接）関わらせてしまっても、仏から見たら罪つくりな事には変わらない。

相手の痛みや自分の愚かさに向き合わなければ、自分の周りで知らぬ間に罪責は積み上がってしまうだろう。日々の暮らしの中で、自分が選択している言動が果たして平和への種となるのかどうか、仏という大きな目で見直すことから始めたい。（文責：報恩寺 林 暁）